

言葉を取れよ、町へ出よう

ドクターからみた田舎のスポーツ

愛媛大学医学部運動器学科 鴨川淳一 (かもがわじゅんじ)

田舎に言葉は必要ない。とは暴論だが、生まれ育ちが愛媛の私は東京に出かけるたびに自身の田舎者度を痛感する。

田舎では、主語や目的語が略される。動詞も短縮される。専門用語や固有名詞は代名詞に置き換えられ、アレヤソレですまされる。文章になると、何のこっちゃ？と、まるで意味がわからない。

例えば、Pop「音楽入れる小さいヤツ」で通じてしまう。小さな社会では、以心伝心で今も立派に意思疎通が成り立つようだ。

この「言葉の簡素化」(不十分さを感じながらも以下、Wordlessとする)は、日本人の特質だろう。小さな社会で同じ価値観を共有す

る者同士が密着して生きることが生まれた慣習であり、Village mentality(村思考)の産物といえる。

俳句や短歌では、あえて主語や目的語を隠すことよって歌に普遍性を持たせ、「影や暗」「余白や空間」といった思考の奥行を表現することが可能だ。そこに私たちは詠み手の情緒や心象を汲む。しかし、スポーツや医学の伝承・進歩にWordlessはマイナスだ。「以心伝心」や「詠む」はまず機能しない。通じない。常に動き、新しい技術や戦術、新説や治療法とともに進化することの分野で、当事者は日々Updateしながらグローバルな変化に対応しなくてはならな

い。「以心伝心」になど頼っていると取り残される。今回は、私がスポーツ障害の治療を通じて感じている、田舎におけるスポーツをめぐる問題点を述べる。

1. 地域間のスポーツ格差

どのスポーツにも専門用語がある。これらの大半は単純明快な言葉で説明されている。しかし、実際の指導現場では田舎に行くほどWordlessだ。身振り手振りで手本を示し、感覚や体験に基づく自己流の説明が目立つ。指導者の属人的で新奇な説や技術が実践されていることもある。非常に田舎的だ。説得性も再現性もない。これ

では選手は伸び悩み、スポーツ障害も増えるというものだ。地域によるスポーツ格差がここに生じる。例えば、欧州の自転車競技には専門のテキストがあり、独学で基礎を学ぶことが可能だ。解剖生理、運動力学、トレーニング、自転車の調整方法から食事、休養、戦術に関する項目まで事細かく説明されている。もちろん基本となる専門用語の解説もある。これでは指導者もうかうかしてられない。より高い知識と指導力を得ようと努力する。これがプロフェッショナルリズムなのだろう。

2009年2月、私は日本サッカー協会の藤田一郎氏と会食する機会を得た。藤田氏は協会創立に尽力され、現在も澁刺と国際委員の仕事がされている。氏曰く「欧州サッカーにはコーチ学とコーチ術があり、伝承のシステムが確立している」。また、「当時、私が欧州サッカーを視察した際は、スタジアムに落ちていた物ですら日本サッカーの参考になった」と述べられた。

コーチ学とは医学同様、百人が

百人とも同じものを身につけることを目的とし、コーチ術とは医師同様、会得した技を特定の人に伝えることを指す。

昨年から小・中・高校生に運動器に関する講義を始め、改めて気づいたのだが、小学校では運動器の授業は行われていない。ましてや骨・筋肉・靭帯・神経の解剖学や生理学に関しては皆無だ。

にもかかわらず、「怪我をするな」と指導する。治療が必要なほどの外傷・障害に対してすら「我慢しろー」だ。もう目を覆いたくなる。健常を知らない学生に障害予防を説いても意味はない。「怪我をするな」ではなく、「どうすれば怪我を防げるか」と説くべきだろう。

欧州の指導学と比べると、日本のスポーツ指導は未熟といわざるをえない。もちろん専門用語を振りかざしての指導を推奨しているわけではない。各世代に応じて指導方法を変える必要もある。しかし指導者の頭に基づいて国際規格の専門知識があるかないかで、自ずと指導にも結果にも違いが出

てくる。技術の伝承と指導の後継者育成のために、原則原理に基づいたスポーツ教育のシステムを確立すべきだろう。それには医師の関心や参加・協力も必要だ。医師の筆による子ども向けのスポーツ医学書などはどうだろうか。指導者対象の医学講習会、討論会などを積極的に導入するのも一案かと思う。

2. 出て行く勇氣

田舎ならではの問題点に「出て行くエネルギーの必要性」が挙げられる。精神的、体力的また時間的、経済的なエネルギーだ。四国は島国などではない。先日の国際学会でも使ったが、まさに「Island of islands. 島国の中の島国だ。ここまで立派な離島となると、自ら出て行かなくては目にも入れてもらえない。

例えば、高校スポーツでの練習試合。飛行機のおかげで近くはなつたとはいえ、東京はまだまだ遠い。また、交通が不便なために田舎から田舎へもまた遠い。四国の場合は特に移動するのが厄介だ。

どこへ行くにも何をするにも長距離・長時間、経済的負担も大きい。中には資金不足のために体育教諭が自費でバスを購入している公立高校もある。これでは他流試合もままならない。海外遠征など夢の夢だ。「出る勇氣」なくしては、スポーツ活動のレベルも高めがたい。各選手が視野を外に向けることと、その実現のための経済的支援を含む交流体制の構築が望まれる。地方を限定とするこの不利な条件、つまり地理的および精神的「壁・Block」への対応がレベルアップへの一歩だろう。

3. 仲間意識と士気の向上

最後の問題点は、小さな社会ならではのチームメイト間の士気の低さだ。職業柄、私は競輪選手と会う機会が多い。A級選手と上位のS級選手とを見てみると、その会話からもプロ意識の差が窺える。例えば、調子が優れず翌日の欠場を考えている選手仲間に対し、A級選手からは欠場を促すような消

極的な意見が、一方、S級選手からは出場を勧める建設的意見が出されることが多いそうだ。誰もが自分の中で「できない理由」(自己限定)を探す。その弱さに負けてしまいそうな時に助言や励ましで士気を高めてくれる仲間がいると心強い。田舎では指導者が自校の選手を囲う傾向が強いが、学校や球団の枠にとられない強化合宿や講習会、プロ選手の練習や試合見学などは仲間同士の連帯感を強め、向上心を養うきっかけになると思われる。そういう機会が田舎でも増えることを願っている。

以上、スポーツドクターのフィールドワークを通して気にかかっている事柄を数点挙げた。無論、地方在住者すべてに当てはまるわけではない。上記について問題ともしない素晴らしい選手も多にいる。地方都市を田舎だと馬鹿にしているのではない。大都市や海外のスポーツの現状と比較した時に目立つ不利なハンディキャップを乗り越えることが向上の鍵になるのではと考えている。地方ならで



はの有利な点も数多くある。それらについては別の機会に述べてみたいと思う（なお、タイトルは寺

山修司氏の評論集『書を捨てよ、町へ出よう』からヒントをいただきました）。